

百花園のみやげ話

百花園は、四季折々の草花とともに、季節の行事も楽しむ庭です。

お正月の元旦から七草までは、百花園に「福祿寿尊」をお祀りし、「隅田川七福神巡り」に善男善女がお参りされます。「隅田川七福神巡り」は、百花園に集う文人墨客が、初春の楽しみとして創出し、谷中、山手と並ぶ、全国の七福神巡りの先駆けとなっております。

七草までは、陶器の「宝舟」に各社で「御分体」を受けたり、御朱印をいただくことができます。

また、百花園独自のお土産としては、初夢を見るために枕の下に敷いた、「木版宝舟」がございます。



春の七草籠

江戸時代に百花園で作りはじめた「春の七草籠」は、(財)東京都公園協会が、年末に予約を受け、頒布しています。



宝舟と御分体



木版宝舟 300円



夏の夕涼みは「虫聞きの会」、秋の夜長には「お月見の会」が開かれ、いずれも、夜までの開園となります。昔から伝わる「籠提灯」で夜の百花園をお楽しみください。

籠提灯 3500円



「向島百花園 秋の花露の染分」

園内にはたくさんの石碑があります。その中に、白波五人男などの作者として有名な河竹黙阿弥にちなむ「狂言塚」と「しのぶ塚」があります。「黙阿弥好み」の浴衣地を、小粋な团扇といたしました。

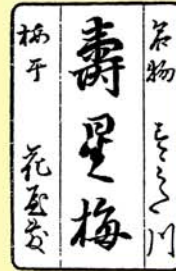
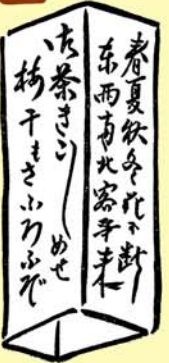
磯の白波团扇 950円



鞠塙像

茶店の行灯には、加藤千蔭（歌人）が「お茶きこしめせ 梅干もさふろふぞ」
(ゆっくりとお茶でも召し上がりませんか。
お茶うけに梅干しもございますよ。)と

したためました。現在、お茶うけは麦落雁になっておりますが、「上煎茶」(300円)は、園内でくつろぐお客様にご愛顧をいただいております。



江戸から伝わる「梅干」の商標

最初、梅の木をたくさん植えたことから「新梅屋敷」と呼ばれた百花園で、当初からのお土産は「梅干」です。

徳川御三卿の田安公が、一番大きな梅の木を、園内に奉る福祿寿尊が南極星の神様と言われることにちなみ「寿星梅」と名付けました。

それ以降、百花園の梅干を「寿星梅」と呼んでおります。



寿星梅 1000円

酒井抱一（画家）は、「梅の花は百花に魁て、春一番に香りを放つ」と中国で言われることから、この庭を「百花園」と呼んだと言われております。

抱一は百花園のために、小誌「梅屋花品」の扉絵に梅の花を描いてくれました。

2004年の百花園開設200年を記念して、この梅の絵を、雪輪の中に復刻して、藍染めのコースターといたしました。



梅花コースター 310円



発行 向島百花園内 〒131-0032 東京都墨田区東向島3-18-3 向島百花園内

茶亭 さはら

電話 03-3619-4997 ホームページ <http://www.hyakkaen.jp/>



席焼 (明治)



都鳥箸置 660円

百花園は東京大空襲で焼夷弾の直撃を受け、石碑だけを残して焼失しました。その後、地元の皆様の復興運動のおかげを持ちまして、昭和24年、都内で最初に復興できた庭園となりました。

この喜びを記念して作られたのが「名菓 百花園」です。素朴な麦、抹茶、南京豆の三種類の味が楽しめ、お月見を描いた「月とススキ」、虫聞きの会で「源氏香鈴虫の巻」、隅田川を象徴する「都鳥」を図柄としております。



名菓 百花園 180円



百花園が大好きな、市井の版画家 塩谷格一さんと、お弟子さん 斉藤さんの風情あふれる「木版葉書」は、春、夏、秋の百花園の息吹を伝えます。(500円)



向島は、江戸っ子向けの新鮮な野菜を作っていました。現在に江戸の砂糖漬け菓子の伝統を継ぐ地元「梅鉢屋」さんが百花園のために、七種類の野菜のお菓子を「七種(ななくさ)」というお土産にしてくれました。(740円)



佐原鞠鳩は、何冊かの書物を著していますが、園内に咲く草花の目録を月毎に整理した「群芳歴」、春秋の七草について考察した「春の七草考」「秋の七草考」をCD版の「百花園叢書」(1200円)にいたしました。

その他にも、百花園の歴史やエピソードをまとめた「東京公園文庫向島百花園」をはじめ、地元の向島や隅田川にちなむ書籍もそろえてございます。

また、草花をスケッチするため、しばしば来園した竹下夢二が描く「草花ポチ袋」(250円)、秋の七草をデザインした「秋の七草小風呂敷」(900円)など百花園ならではの土産を取り揃えてございます。

冬は甘酒、夏はラムネやかき氷など、季節を楽しむお飲物とともに、草庭の一時をお楽しみください。



百花園八景 吟舟翁作歌曲
鳥の名も都となりぬ
梅やしき
在しむかしのおもかげは
四季さまざまの花のさこ
園の内にも世に誇る
その八景の初めには
お成りさしきの茶のまへ
蛙が池の浮葉葦
池亭に聞や虫の声
石碑が岡の花の露
萩の細道一軒茶屋
やくそく固き楽焼は
家の名物招き猫
ござれやござれ人々よ
梅干し提げて遊樂遊樂と
隅田堤の憂さはらし
帰る給ふもひと景色

昭和七年中秋

隅田川の沿岸では昔から焼き物づくりが盛んでした。百花園では「東竈(あすまかまど)」で焼いた「角田川焼(すみだがわやき)」と呼ばれた陶器をお土産としていました。

代表的なお土産としては、現在は東京都の鳥となっている都鳥(ユリカモメ)の箸置きや香合がありました。また、原画は抱一と言われる秋の七草を描いた茶碗でお茶をさしあげていました。

明治になり、素焼きの生地に即席に絵付けをし、帰るまでに仕上げ焼きをした「席焼」(現在の楽焼き)が評判となりましたが、東京大空襲で全園が焼失し、角田川焼きは消滅しています。

現在はレプリカですが、当時を忍ぶ「都鳥箸置」や、そのデザインを受け継ぐ陶器の「都鳥土鈴」と「都鳥携帯ストラップ」、秋の七草の絵付けをしたお茶碗等をお土産としております。



都鳥土鈴 720円



携帯ストラップ 1000円



秋の七草湯飲み 1500円